めか、衣食のためかと悩んでいたためであろうと考える。

恋愛観

一葉の残した作品はどれも皆、恋に破れる女性達を描いているが一葉は恋というものをどう考えていたのであろうか。

一葉の恋愛観は、日記には、

尊いもの
たのしくうるはしくのどかに清らかにまこと円満完了のもの
あさましきもの
只よにおかしく、あやしく、のどかに、やはらかに、悲しく、おもしろきもの
尊く、あさましく、無ざんなるもの
厭ふ恋こそ恋の奥成けれ

と記されている。初めは、恋を明るいあこがれを持ってみているが、わずか一年足らずのうちに、暗いみじめな気持で恋というものを捉えるようになっていく。一葉は恋にあこがれ、恐れ、恋をはかないものと定め、はかないと知っている恋をどうしてもあきらめきれずにそれにしがみついて、ついに『にごりえ』のような作品を書いた。どの女性にも一葉の血が通っているのである。

＜古代文学に現われた他界観念についての一考察＞

第四回卒業　阿部　良子

隠口の泊瀬少女が手に纏ける玉は乱れてありといはずやも（『万葉集』巻三、四二四）

国文学、特に古代文学の研究は、日本歴史との関連の上からとらえなければ解明出来ない問題が数多くあるように思う。右の歌は、「死者の身につけた玉の緒を切る」という、古い慣習をふまえた作品であることがわからずに、いまだに諸注の解釈は安定していない。

古代の文学研究、特に神話研究においては、民俗学や文献批判学、比較神話学などの研究成果に立脚して、多くの問題が解決され、また続々と解明されつつある。神話の類型や伝播のありさまは、文化人類学や比較神話学の前進により、しだいに明らかにされてきた。

わが国の神話は、『古事記』『日本書紀』の神代巻に主として記録されている。七世紀後半から八世紀のはじめの段階に、現実の皇室や諸氏族とのかかわりにおいて、きわめて体系的にまとめられたものである。それは、神話本来の姿に作為を加え、潤色して出来上がったものである。しかし、だからと言って、記紀神話を無視しては日本の神話の本源は探ることは出来ないであろう。作為、潤色される前の本来の姿はどうであったか。文学としての「記紀」の内部から神話の本質を追求しようとする努力が、もっともっと要求されるのである。それと同時に、日本神話の独自性は、わが国の風土と歴史の中で、もっとあきらかにすべき問題である。

私は考古学に対する興味から、わずかながら考古学の研究成果も学んで来た。卒論では私の考古学の若干の知見と、これまでの神話研究上の成果を踏まえ、「記紀」神代巻でも興味ある問題とされるイザナキ黄泉国訪問神話を中心に、わが国古代に生きた人々の他界観念の、如何なるものかを探ってみることを試みた。

記紀の物語る黄泉国が、一体どのような世界かということについ

ては、これまで比較神話学者、考古学者、民俗学者など、各分野の学者によって、いろいろな説が出されて来た。その主なものは、古墳説、洞穴説、殯宮説の三つであると言って良いと思う。だが、いまだにこれと言った確定的なものは出されていない。

私は、黄泉国＝横穴式石室と考え、しかも根底には殯宮の精神が流れていると考えた。これを説明する上での好材料は、イザナキが黄泉国から逃げ帰る時に用いた様々の呪物と、古墳の副葬品との関係である。

ここで指摘したいことは、「ナゲグシヨイム」という思想が、考古学の報告書に反映していないことである。この思想を知った上で報告書が書かれていれば、国文学の研究の上にも大きく影響してくるであろう。学界の意見交換の必要性を痛切に感じた。それをなし遂げることは、容易ではないが、私たちの世代が実現への努力をしたいと思う。

〈挽　歌〉——発生と人麻呂以前——

第四回卒業　伊藤　和子

日本の文学史上、「挽歌」という語は万葉集にのみ現われたのであり、それ以前の文学はもちろんのこと、それ以後の文学においても現われることはなかった。しかも、「挽歌」は「雑歌」「相聞」と並んで万葉集の三大部立を形成しており、万葉集においては非常に重要な役割を果している部立ということができる。そこで、このように万葉集において大きなウエイトを占める「挽歌」が、何故万葉以前、及び万葉以後における文学に全く存在しないのかという疑問が生じてきたのである。そしてこの問題は「挽歌」の本質という問題とも関連を持ち、かなり広い範囲にわたって考察を進めなければ解決がつかないように思われた。つまり、「挽歌」の発生という問題から始まり、「挽歌」が万葉集の中でどのように展開していったか、又、質的にどのような変化を見せていったかということを考えなければならないのである。以上のような流れを明らかにし、その中の個々の問題が解決された時、何故「挽歌」が万葉集のみに現われたのかという問題も、自然と解決され、「挽歌」の本質に一歩でも迫り得ることができるものと思われた。

そこで万葉集における「挽歌」の展開の跡をたどっていくわけなのであるが、便宜上、「挽歌」の頂点を形成した人麻呂を中心に、人麻呂以前、人麻呂、人麻呂以後の三つの時代に分けて考察を進めていくことにした。そして今回の卒論では、「挽歌」の発生から人麻呂以前という初期の部分だけの考察にとどまってしまったのである。

まず第一章では、「挽歌」の意味と範囲を規定しなければならないということで、『文選』における「挽歌」の意味の検討、万葉集の「挽歌」と『文選』の「挽歌」との比較ということを通じて、万葉集における「挽歌」の意味と範囲を明らかにし、「挽歌」の外面的位置づけをおこなってみた。

第二章においては、古代人が「死」ということに対してどのような感情を抱いていたかということを考えてみた。「挽歌」はあくまで「死」に関した歌であり、「死」及び「死者」と密接な関係を持っている。従って古代人の「死」に対する感情を明らかにすること